

家政学における女性学の位置づけ—女性学の発生(1)—

元福岡教育大 平田 昌 東筑紫短大の花崎正子
西九州大家政 河野孝子 佐賀大教育 赤星礼子

家政学将来構想1984は、家政学の研究対象を「家庭生活を中心とした人間生活における人と環境との相互作用」と定義したが、その対象を例に「家庭生活」、「人間生活」、「人と環境との相互作用」のいずれにも規定しようと、その対象認識の原点は、「生活主体が自身自身のfunction」にあり(第33回 日本家政学会九州支部大会)、これは、「人間が人間として生きる」という目的遂行活動である。

また、同構想は、その目的を「生活の向上」とともに人間福祉への貢献」と謳っているが、何を以て、その生活の「向上」とするかの論議は、未だ十分につくされていない。

女性学が、「女性性は社会的に抑圧された集団であり、その結果、女性性は学問研究のあらゆる分野において、研究主体としても研究対象としてもなおざりにされ、支配者である男性の視点によって差別的にとり扱われてきた」(山口兵、山手茂「女性学概論」)のことであれば、とくに、家政学が、男女の生き方の異なる生活分野を対象とするだけに、「生活主体」への理解も、「人それ自身のfunction」についての認識も、「女性の視点」からの再検証が必要であろう。さらにまた、何を以て生活「向上」とするかの認識も、「女性の視点」に照らして再検証するべきであろう。

したがって、今回は、生かす「女性の視点」等の論議となる「女性学の発生」について述べて、家政学認識方法浄化の一助としたい。さらに、女性学視点からの家政学論の展開は、家政学の実践科学として論議を実証的に明らかにしてくれるであろう。